

2025 年度日本地理教育学会 12 月例会

1. テーマ：資格・検定試験と地理教育

2. 日時：2025 年 12 月 6 日（土） 15:00～17:30

3. 会場：獨協大学コミュニティスクエア

4. 開催方法：ハイブリット

5. 主催：日本地理教育学会集会委員会

6. 共催：獨協大学環境共生研究所

7. プログラム

司会進行：山本隆太（静岡大・集会委員長）・大高皇（跡見女子大・集会副委員長）

会場校より：大竹伸郎（獨協大）

15:00 開会のあいさつ 田部俊充（日本地理教育学会長・日本女子大）

15:10 趣旨説明 秋本弘章（日本地理学会常任委員長 獨協大）

15:15 発表 1 山田耕生（千葉商科大） 旅行業務取扱管理者試験と地理教育

15:45 発表 2 石橋生（桐蔭学園高校） 世界遺産検定と地理教育

16:15-16:30 休憩

16:30 発表 3 竹澤史也（日本地図センター） 地図地理検定と地理教育

17:00 コメント ト部勝彦（日本大）

17:15 総合討論

17:45 総括

17:55 閉会の挨拶 本木弘梯（日本地理教育学会副会長・早稲田高等学院）

8. 企画趣旨

今日テレビでは多くの地理情報番組が放送されているように、地理は学校教育だけでなく生涯学習の観点からも注目を集めている。本シンポジウムでは、地理教育とかかわりの深い資格・検定試験の 3 つを取り上げる。旅行業務取扱管理者試験は国家試験であり、旅行業界では必須とも考えられている資格である。法令や約款、運賃計算等と並んで、旅行地理の出題が大きな割合を占めている。これに対して、世界遺産検定と地図地理検定は、直接業務資格に結び付くものではない。しかしながら教養を高め、人生を豊かにする検定試験として多くの受験生を集めている。

これらの試験をもとに、学校地理教育の意義や役割から生涯教育としての地理について再検討していきたい。

発表1 旅行業務取扱管理者試験と地理教育について

山田耕生（千葉商科大）

旅行業務取扱管理者は旅行業法で定められている国家資格で、旅行会社が旅行商品の販売を行う営業所に最低 1 名の資格保有者を配置する義務がある。旅行業務取扱管理者試験は総合、国内、地域の 3 種類あり、それぞれ年 1 回実施されている。このうち総合では海外観光地理と国内観光地理が、国内では国内観光地理の出題がある。受験者数は総合では 2024 年度 4,680 人、国内では 2025 年度 10,329 人で減少傾向にあり、いずれもピーク時の 1/3 程度まで減少している。旅行業者数も 1995 年をピークに減少していることや、IT 化の進展による OTA（オンラインに特化した旅行業者）全盛の時代のなか、各旅行会社による店舗閉鎖が進んでいることが影響として考えられる。

これまでの試験における観光地理の出題をみると、まず観光資源の知識をいかに多く持っているが前提となっている。観光資源のジャンルは例えば 2025 年度試験では神社、橋、城、半島、溪谷、滝、島、庭園、温泉、名産品、祭り、テーマパークなど多岐にわたっている。そのうえで観光資源の地図中の位置や所在する都道府県を問う出題が多い。これら史跡や自然資源などの観光資源は、従来の地理教育では教科書にはほとんど記載されていない。したがって各個人の旅行経験の差が知識の量に大きく影響している。とりわけ総合の試験で出題される海外の観光地理についてはこの傾向が強い。また観光地を巡るプランに関する出題もあり、これについては都道府県や主要都市の位置関係や、主な地形や交通の空間を把握しているかが鍵になっている。

今日の旅行スタイルや人気訪問先もかつてとは異なり変化している。また旅行先の情報をスマートフォンを通じて簡単に入手し、定番ツアーなどは旅行者が直接インターネットで申し込む時代である。今後の旅行会社にはよりテーマ性や地域性の強い旅行者に対してコンサルティング型のビジネスが求められていく。その点を反映した旅行業務取扱管理者試験の内容も必要といえる。

発表2 世界遺産検定と地理教育

石橋生（桐蔭学園高校教諭・世界遺産アカデミー客員研究員）

世界遺産を活用したクイズ番組や旅行企画など、テレビ・インターネット・書籍でも「世界遺産」という言葉を目にする機会が多くなってきた。世界遺産検定（NPO 法人世界遺産アカデミー主催・文部科学省後援）とは、「人類共通の財産・宝物である世界遺産を通して、国際的な教養を身に付け、持続可能な社会の発展に寄与する人材の育成を目指した検定試験である。情報や人のボーダーレス化が進む現在、一般社会や企業でも国家や文化などの枠を超え、地球規模で柔軟に物事を考え行動できるグローバルな人材の育成を目指している。世界遺産の知識や学習を通して得た歴史等の知識や異文化への理解は、日々世界で起きる出来事を理解し対処するために必要な一般教養として、さまざまな業界でも活用する場面が増えてきた。2006 年に始まって以来、40 万人が受検し 20 万人以上が認定されており、

受検料の一部はユネスコに寄付され、世界遺産の保全活動に活かされている。」(世界遺産検定 HP の内容を一部改訂)

報告者は、高校地理科の専任教諭として高3地理探究で受験指導をしながら、高1・高2の探究の授業で世界遺産ゼミを担当している。教材研究の一環として始めた趣味の世界遺産学習が功を奏し、2024年7月に実施された第56回世界遺産検定の最上位級であるマイスター試験に全国1位で合格、2024年11月に世界遺産アカデミー認定講師に就任、2025年4月に世界遺産アカデミー客員研究員に就任した。世界遺産学習を活用した地理総合・地理探究と探究学習の相互環流となる授業の考案と実践を繰り返して試行錯誤しながら、世界遺産アカデミーと東京大学で研究している。近年の大学入試の動向を踏まえ、報告者が桐蔭学園高校と横浜国立大学で実施した世界遺産を活用した授業実践例やふりかえりを紹介するとともに、世界遺産検定と地理教育に関する報告を行いたい。

発表3 地図地理検定と地理教育

竹澤史也(日本地図センター)：

地図地理検定(ちずけん)は、「地図や地理の知識を豊かにし、地図を楽しく読み・使う力を養う」ために、一般財団法人日本地図センターと公益財団法人国土地理協会が共同で実施する検定である。年2回の実施で、各地方に設けた会場での一般受検と、団体受検とがある。団体受検は、各団体で設定した学校や会社などを準会場とし、検定監督者のもと、5名以上の受検希望者が受検する方法である。

2004年に「地図力検定」としてはじまった本検定は、当初は、地図や空中写真に関する専門的な知識を問う設問が多く、とくに地図愛好者をおもな対象とした検定であった。2010年の第14回からは国土地理協会との共催となり、「地図地理検定」と名称を変更し、レベルを「一般」と「専門」に分けて実施するようになった。2018年の第29回からはより教育的な内容に配慮し、地図やグラフ、統計などから地域や世界を考察する設問となるよう、出題分野を改定した。2022年の第37回からは、高等学校での「地理総合」必修化に合わせて出題分野を再度見直し、また「一般」を「基礎」と名称変更して実施している。

「基礎」は、「地図・地理に関する基礎的な知識や技能を問う」もので、出題数は20問、1問5点の100点満点であり、60点以上を合格としている。現在の出題分野は、「地図・地理に関する全般的な事柄」とし、具体的には、①地図、②自然環境、③社会文化環境、④世界や日本の地理、⑤その他である。自然地理、人文地理、地誌に関する設問がまんべんなく出題されているが、地図に関する設問の比重が大きいことが地図地理検定の特徴でもある。実際に団体受検を活用した学校からも、「地理総合の授業と地図地理検定の内容がリンクしている」「地形図学習のモチベーションがあがった」などの声をいただいている。また、2025年には公式テキスト『ちずけんでまなぶ地図と地理』が発売されるなど、地理総合を軸とした地理教育のさらなる発展に寄与しているといえる。